言論を暴力と脅迫で封殺しようとする勢力との闘いの記録

『標的』上映＆トーク

2022/4/30（土）

13：00～14：45　1回目上映
14：55～16：20　トーク
16：40～18：25　2回目上映

開場 12：30

映画は２回上映で入替制になります。
参加費：1,000 円（学生無料）映画１回とトーク

広島弁護士会館 3F 大ホール
（広島市中区上八丁堀 2-73）

2020.2.6 札幌控訴審判決の日
植村裁判を支える市民の会 HP より

《トーク》

植村隆さん　「言論人としてこれからも闘う」

2018.8.7 広島での講演会

1958 年生まれ『週刊金曜日』発行人兼社長。元朝日新聞記者。元カトリック大学招聘教授。著書に『真実―私は「捏造記者」ではない』（岩波書店）、『マンが韓国現代史　コバウおじさんの 50 年』（金星煥氏との共著、角川ソフィア文庫）など。「捏造記者」の汚名を晴らすため提訴した裁判は敗訴が確定（2021.3.11）。

西嶋真司監督　「標的とメディア」

1957 年生まれ 1981 年ＲＫＢ毎日放送入社。1991 年から 1994 年までソウル特派員。「コタ・バル～伝えられなかった戦争」（2011）、「嗣治からの手紙～画家は、なぜ戦争を描いたのか」（2014）など戦争を中心とするドキュメンタリー番組を製作。ドキュメンタリー映画「抗い～記録作家林えいだい」（2017）、「標的」（2021）で監督を務める。『標的』で韓国の第 33 回アン・ジョンピル自由言論賞を受賞。

『標的』2021年 JCJ（日本ジャーナリスト会議）賞を受賞

＜受賞理由より＞

元朝日新聞記者の植村隆は 1991 年 8 月、「元慰安婦重い口を開く」と記事を書いた。約四半世紀後の 2014 年、櫻井よしこらによる植村へのバッシング攻撃が突然始まった。映画「標的」は植村に対する卑劣かつ凶暴な攻撃の実態と、植村の訴えに背を向け、不当判決を繰り返す司法の姿を映し出す。

歴史修正主義の逆流を剝き出しにした攻撃と闘う植村に、一筋の光となる記事が見つかった。「週刊時事」（92 年 7 月 18 日号）に櫻井寄稿の原稿が掲載されている。その中で櫻井は「売春という行為を戦時下の政策の一つとして、戦地にまで組織的に女性たちを連れて行った日本政府の姿勢は言語道断」と書いている。植村の記事と同じ内容だ。

植村は、朝日新聞阪神支局で赤報隊の銃弾に斃れた（1987 年 5 月）小尻記者の墓に足を運び、手を合わせた。小尻とは同期入社の仲だ。「バッシングは許せないと、多くの人が支援してくれる。私には喜びであり、感謝しかない」と植村。ジャーナリズムは植村を孤立させてはならない。

アン・ジョンピル自由言論賞とは

元東亜日報のアン・ジョンピル記者が、1970 年代、当時の朴正熙（パク・チョンヒ）大統領による軍事独裁政権を批判し、激しい言論弾圧に臆することなく筆を折らなかった意志を讃えるため 1987 年に韓国で制定された賞。日本人としては西嶋真司監督が初めての受賞となった。

共　催：日本ジャーナリスト会議広島支部（JCJ）
　　日本軍「慰安婦」問題解決ひろしまネットワーク
連絡先：090-4650-1208（難波）　090-3632-1410（土井）

新型コロナ感染状況によって人数制限を行う場合があります。
その場合は事前販売の入場券をお持ちの方を優先します。
また、急遽延期する場合もあります。その場合は各 ML・SNS 等でお知らせします。
入場時には感染防止のため、マスク着用、検温、手指消毒等にご協力ください。